

企画趣旨

ネオリベリズムを再審する ——都市・空間・統治——

2000年代の日本社会の変動を語るキーワードのひとつは、間違いなくネオリベリズムであった。では、現在はどうか。

1990年代半ば以降、バブル経済崩壊後の経済不況が深刻さを増し、既存の制度の機能不全と閉塞がリアリティをもって受け止められるなかで、国家・市場・市民社会の境界再編をとものなう構造「改革」の必要性がさまざまな立場から説かれ、それを前提とした新たな主体性のあり方や、その動員/介入に向けた新たな権力作動の様式が構想されてきた。2000年代に入ると、こうしたシステム転換の構想を社会に実装する試みは本格化し、またその帰結も徐々に顕在化しはじめる。

社会保障、労働、都市・空間、市民社会・・・「改革」の帰結がそれぞれの領域において現れはじめるなか、それに対する抵抗の実践や、一連の動向についての批判的分析において、事態の〈全体〉を名指すうえで領域や分野を超えて緩やかに共有されてきたのがネオリベリズム/ネオリベラル化という視角であった。それはまた、日本社会の経験を先進資本主義社会のグローバルな経験と同じ地平に位置付けるための回路でもあった。こうした視角のリアリティと切実さは、2008年のリーマンショックとその後の危機においてピークに達する。その延長線上において、2011年の東日本大震災後の復興政策もまた、その直後から「惨事便乗型資本主義」という視角から問題化されてきた。

リーマンショックから10年。2012年の政権交代と安全保障政策の転換、東日本大震災後の「国土強靱化」政策と公共事業の再拡充、インフラストラクチャの輸出と民営化、オリンピックの誘致と都心部再開発、ストリートにおける抵抗の活発化など、必ずしも単一のストーリーには収まりきれない出来事が連鎖する2010年代も終盤にさしかかりつつある現在、ネオリベリズム/ネオリベラル化という視角には、どのような意味で、またどの程度、事態を捉える力があるのだろうか。

はたしてネオリベリズムは、その適用対象たる〈社会的なるもの〉の存立を不可能にするまでに貫徹したからこそ、それを問題化することの意義も既に失われたのか（または、貫徹したからこそ問題化することの意義が増しているのか）。あるいは、現在もまたネオリベラル化のさなかにあるがゆえに、ネオリベリズムという視角の彫琢こそが必要なのか。そもそも異なる領域で同時多発的に進んだ変動をネオリベラル化として一括りにしてきたことの得失は、いかに整理されるのか。

本ワークショップは、ネオリベリズムと統治・政治をめぐる諸問題を、都市・空間・市民社会、あるいはより具体的な施設など、幅広いフィールドに立脚しつつ2000年代から研究してきた第一線の研究者を招へいし、ネオリベリズムの現在について領域横断的な議論を試みる。